現場から読む『異文化の理解：モロッコのフィールドワークから』

石　明美（早稲田大学大学院文学研究科文化人類学コース博士課程）

Reflections on Fieldwork in Morocco Revisited: Notes from the Field

Mingmei SHI
PhD Program in Cultural Anthropology, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

ABSTRACT

This review discusses *Reflections on Fieldwork in Morocco* by Paul Rabinow, focusing on how anthropological knowledge emerges through the emotional and relational dimensions of fieldwork. Based on his 1968–69 research, Rabinow highlights the tension between personal experience and academic objectivity, offering a reflexive account of fieldwork as an unstable and emotionally involved process. Drawing from ongoing fieldwork in urban Morocco, the reviewer considers how moments of emotional dissonance and ambiguity can become sources of insight and understanding. The review also reflects a broader anthropological turn toward recognizing the significance of emotions in fieldwork, not merely as subjective noise but as meaningful components of knowledge production. Rabinow's narrative offers a framework to rethink the epistemological value of discomfort, relational instability, and affective encounters in the field. In doing so, this review positions such experiences as central to the ethnographic process, and as potential starting points for deeper reflection and inquiry.

1. はじめに

本書，『異文化の理解――モロッコのフィールドワークから』（ポール・ラビノー著，井上順孝訳，1980 年，原著 1977 年，原題 *Reflections on Fieldwork in Morocco*）は，人類学者ポール・ラビノーが 1968 年から 1969 年にかけてモロッコで行ったフィールドワークの経験をもとに，その過程を再構築的に綴った民族誌的エッセイである。ラビノーは，調査者としての個人的経験と，人類学という学問的枠組みにおいて求められる客観的記述とのあいだに存在する緊張に着目し，フィールドワークという方法の構造そのものを可視化している。

調査地セフルーにおける赤裸々な経験と，それを後に省察的に記述し直す過程から立ち上がる知は，50 年以上を経た現在，モロッコ都市部でフィールドワークを行う筆者自身の経験と響き合い，また調査におけるひとつの指針ともなっている。他者理解の難しさ，感情の揺れ動き，そして調査者としての立場の揺らぎは，フィールドの只中で避けがたく経験されるが，同時に，他者に接近し得る重要な契機のひとつでもある。フィールドワークの只中に身を置く著者にとって，本書を読み，書評を執筆することは，そうした経験に対する共感を呼び起こすと同時に，人類学的知がどのように生成されるのかを，改めて問い直す機会となっている。さらに，本書評執筆の背景には，近年の人類学における感情の記述･扱いに関する議論への関心もある。『Emotion in the field』(2020) の序章において，ジェームズ・デイヴィスは，1980 年代から 1990 年代初頭の再帰的転回（reflexive turn）において，調査者の感情がしばしば見過ごされてきたことを指摘し，調査者が経験する感情がフィールドワークのデータの一部として，方法論的妥当性を持ち得ることを示唆している［Davies 2020］。それは，単なる主観的なものではなく，経験の関係的構造を反映する媒介であり，また研究者の倫理的関与を触発する媒介ともなり得る［同上］。本書評は，ラビノーの具体的なフィールド経験を手がかりに，こうした感情から導き出される知のあり方を考える一助ともなるだろう。

本書評では，第 2 節において，各章で展開されるフィールドワーク経験を辿りつつ，そこから導かれる方法論的論点を整理する。特に，フィールドワークを通じた他者理解の実践において生じる，感情・関係性・権力といった経験的側面がどのように取り上げられるのかを検討する。第 3 節では，筆者自身の現在のフィールド経験と重ね合わせながら，こうした感情の経験にいかに向き合い，それを学問的実践としてどのように位置づけ得るのかという課題に考察を加える。

2. 各章の概要および論点の整理

本書の目次は以下の通りである。

序章
第 1 章　滅びかけた植民地主義のなごり
第 2 章　パッケージ商品
第 3 章　アリー――インサイダーにしてアウトサイダー
第 4 章　入村
第 5 章　信頼できる情報
第 6 章　侵犯
第 7 章　自己意識
第 8 章　友情
結論

序章においてラビノーは，「フィールドワーク」を人類学者にとってのイニシエーションとする前提に立ち，その実践を通じて明らかにされる文化的事実が，フィールドワークという経験と不可分な関係のもとに結び付けられることを示している。文化的事実の把握は，常に人類学者自身の身体的および感情的関与，すなわち経験を媒介として構成され，決して中立的なものではない。ラビノーはこの点を，ポール・リクールの解釈学の枠組みに拠りつつ，フィールドワークを，経験後に現象学的に立ち現れる，一つの文化のまとまりを記述する営みとして捉えている。したがって，本書に収められた一連のエピソードは，単なる記述的な経験談ではなく，個別的な出来事を出発点として，文化の抽象的理解へと至る解釈的プロセスそのものを呈示するものとなっている。

第一章では，調査地セフルーの紹介を通じて，本書のフィールドが次第に輪郭を帯びていく。客観的な地誌情報が提示される一方で，続くラビノーの体験的記述は，フィールドワークの開始が常に計画的ではなく，むしろ予期せぬ形で始動することを象徴的に描き出している。ラビノーが現地に入って最初に関係を築くのは，フランス出身でホテルを経営するリシャールという人物である。彼は，植民地支配の記憶を引きずりながらも新しいフランス人社会に馴染めず，モロッコ社会とも一定の距離を保って生きる境界的存在として描かれる。そのリシャールは，言語的にも文化的にもラビノーにとって最初の拠り所となるが，その関係性は同時に，フィールドワークにおける立場の複雑さと，外部者が現地社会にどう位置づけられるのかという問題を先鋭化させる。

ラビノー自身は，リシャールとの関係において支配でも服従でもない対等な立場を見出すが，その心地よさが，実は調査における停滞をもたらしかねないことを自覚していく。ここに，フィールドワークの初期段階における安心の仮構をいかに乗り越え，より対話的な関係構築へと移行するかという，調査者自身の内面的な転回が示されている。

第二章では，アラビア語教師イブラヒームとの交流を軸に，ラビノーが初めて直面する「〈他者性〉の直接的経験」（p. 42）が描かれる。イブラヒームは，誠実かつ知的な教育者として登場するが，彼が媒介する言語的知識は，あくまで文化的にパッケージ化されたものであり，その内容は選別的である。ラビノーは，このような教示が「モロッコ人の現実の生活と向かい合っていく場合に役に立たない」（p. 38）と述べており，ここにイブラヒームによって設定された理解の形式が露呈している。すなわち，フィールドにおける知の伝達とは，単なる情報の共有ではなく，他者の無意識的な防衛線と対峙する営みでもある。

このような内面化された抵抗は，他者との関係構築において避けがたい構造的経験であり，それがより明確に表出するのが，イブラヒームとのマラケシュ旅行である。調査の枠から外れた娯楽的な場面においても，イブラヒームの同行や，旅費の一部をラビノーに支払わせようとする振る舞いには，ラビノーを資源として捉える視線が見て

取れる。それは，相互理解とは異なる次元での駆け引きが機能していることを示唆する。この出来事は，他者とのあいだに横たわる倫理的な境界を可視化させ，ラビノーはここで，「他者は他者としてしか受け止められない」という状況的な限界を認識する。友人であると考えていた相手から距離を感じ取ったラビノーの動揺は，文中からも隠しきれない。しかし，こうした感情的起伏から導かれたのは失望というよりも，他者理解のプロセスに内在する構造的緊張を浮き彫りにする通過儀礼的契機だったといえよう。

第三章では，治病師アリーとの協働を通じて，知の生成がいかに相互行為的なプロセスとして成立するかが示される。アリーは，単なるインフォーマントにとどまらず，ラビノーとともに実践の意味を逐次解明していく協働的パートナーとして機能しており，この関係性の中で両者のあいだに「弁証法的過程の始まり」（p. 57）が生じたとされる。ここで焦点となるのは，知識の構築を一方向的な情報の授受としてではなく，インフォーマントと人類学者とのあいだに形成される相互主観的な空間での能動的な交渉として捉える視点である。アリーは，自身の実践について絶えず自己を解剖し，ラビノーの問いかけを通して言語化と理論化を試みることで，実践知を学術的知へと媒介する役割を担っている。

もっとも，アリーのような協力的なインフォーマントとの関係においても，調査者の立場が常に安定しているとは限らない。ラビノーがアリーとともに村の結婚式を訪れた際のエピソードはその象徴的な一例である。アリーは当初の予定よりも長く式に滞在し，帰路が遅れる中でも厚かましくホストとしての役割を全うしようとする。その姿勢を見たラビノーは，アリーが自分との関係に「探り」を入れていると感じる。この「探り」とは，単なる打算ではなく，信頼と距離の再設定に向けた関係性の再編成として理解できる。ラビノー自身もまた，この変化に巻き込まれ，自己を抑制しインフォーマントの語りに寄り添うという従来の調査者像が揺らぎ，自らの価値観や選択を問われる状況に直面する。こうした関係性の危機を乗り越え和解に至ったその先で，得られる知見の深度が大きく広がっていった。この広がりが，方法論的な熟練のみによってもたらされたのではなく，調査者の感情的経験と，そうした感情への対処の先に結実したものであることは，言及に値するだろう。

第四章では，ラビノーがセフルーを離れ，宗教的中心地とされるスィディ・ラハスン・ルユッスィの村へ調査の場を移す過程が描かれる。この移動は，単なる空間的なものではなく，インフォーマントとの関係性を再編成する転機でもある。セフルーで信頼を築いていたアリーは，新たな村への紹介者として機能するが，同時に村人からは倫理的批判の対象ともなっており，彼との関係が新たな調査地での障害となるという逆説的状況が生じる。このことは，フィールドにおいて調査者が単に知的な客体化を行う者ではなく，常にすでに政治的関係性の網の目の中に投げ込まれた存在であることを示している。特に，外部者であるラビノーの滞在そのものが「何をしに来たのか」という問いを呼び起こし，その正当性を説明可能なものとしなければならないという状況は，調査者がコミュニティに対していかなる利益をもたらしうるのかという問いを不可避にする。ラビノーが用いる「援助」（p. 113）という語の持つ権力性への自覚は，ポストコロニアル以降の人類学における重要な論点に通じ，外部者の関与がもたらす力学への注意を促している。

また本章では，参与観察という方法論的前提にも批判的視座が向けられる。参与は信頼関係の構築や情報の正当性に寄与する反面，調査者が本質的にアウトサイダーである限り，その参与もまた観察の対象としなければならない。すなわち，参与と観察のあいだを往還する反省的な運動が求められるのである。

最終的にラビノーは村への受け入れを得るが，インフォーマントとの関係性は一筋縄ではいかない。彼が述べるように，「インフォーマントを見つけ出し，育てていき，そしてその人間を変えていくこと」（p. 133）は，フィールドワークにおける避けがたい過程である。例えば，新たに関係を結ぶラシードは，村の中で評価が芳しくなく，その評判が曖昧であること自体が彼の社会的立場の不安定さを物語る。特に注目すべきは，ラシードが人類学者と働くことを，ある種社会的報復の手段とみなし，自らの承認を獲得するための戦略として用いている点である。このように，調査者が意図せぬかたちで村の権力関係に巻き込まれ，その関係性がゆるやかに終息していくプロセスは，フィールドワークがもつ動的かつ倫理的な性質を端的に示している。

第五章では，スィディ・ラハスン・ルユッスィにおける主要インフォーマント，アブドゥル・マリク・ブン・ラハスンとの関係を軸に，フィールドワークにおけるデータ収集と知識生成の複雑なプロセスが描かれる。マリクは

実直な協力者であり，村人との橋渡しを果たす一方，自らも調査を通じて自己認識の変容を迫られていく存在として提示されている。調査初期，ラビノーとマリクとのあいだには一定の距離が保たれ，そのもとで，系譜調査や社会構造に関する量的データの収集が着実に進んでいた。この時期，ラビノーは自らの立場や方法論を相対化する必要性をあまり感じておらず，調査者としての自我は一時的な安定を得ていた。調査が進むにつれ，マリクは自らの社会的地位を新たな視点から見つめ直すことになり，調査によって自らが対象化されることの意味に直面する。それまで彼が認識していた自己像は，客観的な量的データからは浮かび上がらない，関係性や価値判断に強く依存した文脈的なものであった。彼は何かを偽っていたわけではなく，むしろそのような状況を生きていたのであり，調査を通して初めてその文脈のずれに気づかされたのである。こうした過程でラビノーが示すのが，人類学者が生み出す二重の意識の現れである（p. 172）。すなわち，①人類学者自身の解釈が歴史と文化によって媒介されていること，②インフォーマントの語りもまた，彼らの歴史と文化によって媒介されているという事実である。この二重の媒介性に気づいたとき，それまで安定なものとみなされていた量的データも，文脈依存的な意味のネットワークとして再解釈される対象となる。本章の興味深さはまさにこの点にある。すなわち，調査者がフィールドでの具体的経験を媒介にしながら，フィールドワークそのものへの認識論的省察へと踏み込むことで，文化の記述が深化していくというプロセスが実践として描かれている。この過程は，人類学者とインフォーマント双方に変容をもたらす，認識の場としてフィールドワークの可能性を示している。

第六章では，ラビノーがフィールドワークをより焦点化させるべく，モロッコ保護領期における政治的事件に関する聞き取り調査に乗り出す過程が描かれている。この時期の記憶は，村人たちにとって極めてセンシティブなものであり，語ること自体が避けられる傾向にあった。記憶の抑圧，政治的恐怖，そして集団的沈黙という状況の中で，調査は行き詰まりを見せる。しかし，こうした行き詰まりを偶発的に打開したのが，かつてセフルーでインフォーマントとして登場した治病師アリーの再登場である。アリーは，村において複雑な評判を有しており，その立場がむしろ他の村人の語りを促す触媒として機能することとなる。アリーが語った歴史的記述に対して，村人たちはある種訂正するかたちで自身の記憶を語り始め，それによってこれまで得られなかった情報が次第に明らかになっていく。この構図において，ラビノーが収集したデータは，インフォーマント間の相互的対抗関係によって媒介されたものであり，あくまで客観的な証言ではなく，関係性と語りの政治によって形成された，語りの場の産物である。

問題は，こうして得られた情報の倫理的な正当性である。ラビノー自身も，偶発的に開かれた場に便乗するかたちでデータ収集が進んだことを自覚していたが，それでも彼は，開かれた風呂敷を畳むことなく，情報の流れに身を委ねた。この状況をラビノーは「象徴的暴力」（p. 189）という語で説明している。ここでの象徴的暴力とは，調査者が情報を引き出す主体である以上，その関係性の非対称性を通じて，意図せざる圧力や権力作用が生じてしまうことを指す。ラビノーは，その強度の差こそあれ，こうした暴力がフィールドにおいて避けがたく生じるものであることを示唆している。

第七章では，スィディ・ラハスン・ルユッスィの村において，聖者をめぐる伝説や宗教的実践がどのように村人の記憶と現在の認識に結びついているのかが探究される。本章では，ムースム（聖者を称える祝祭）や，他部族の訪問といった儀礼的な出来事が調査対象となる。これらの実践に関して，村人たちは明確な抵抗や情報提供の拒否を示すことはなく，むしろそれを語ること自体が，自らの社会的つながりや集団的アイデンティティを再認識する契機となっていたと考えられる。

ラビノーは，こうした象徴的行為の中に村人の文化的核心が見出せるのではないかと期待を寄せていたが，実際に見出されたのはむしろその不安定性や脆弱性であった。ムースムや訪問の儀礼は，村のアイデンティティを象徴するものとして存在しながらも，実際にはもはや十分に機能しておらず，共同体の再統合の場というよりも，むしろその変質と断絶を可視化する出来事として現れた。興味深いのは，こうした文化的実践が村人自身にとっても，日常的には意識されていなかったものであるという点である。調査を通じて言語化され，外部者であるラビノーに説明する過程のなかで，村人は時間差を伴いながら自己の文化的アイデンティティに対して意識的になっていく。すなわち，調査という行為が村の現実を映し出す鏡となり，そこに再帰的意識が立ち上がる過程が明らかになっている。

第八章「友情」では，ラビノーがドリース・ブン・ムハンマドとの関係を通じて，これまでの調査とは異なるかたちの関わりを築いていく過程が描かれる。ブン・ムハンマドは従来のインフォーマントとは異なり，ラビノーと対等な立場で思索を交わす対話者であり，その議論を通して両者は互いの文化的・宗教的背景を省察する関係へと移行していく。この章では，ラビノーとブン・ムハンマドの対話が多く引用され，両者は異なる文化的・宗教的伝統を生きる存在として，互いの立場を問い直していく。なかでも，ブン・ムハンマドのイスラーム理解が重要な議論の焦点となる。彼は，理想的なイスラーム像として，聖者スィディ・ラハスンの教えを参照する一方で，その末裔の信仰や自己流を貫く父親の姿に対して複雑な思いを抱いている。それは批判であると同時に，そうした現実を生きることへの理解でもあった。

また，対話の中には，これまでの主要インフォーマントであるマリクの語りも登場し，特に，コーランを出典とする色の象徴性に関する議論を通して，人種的差異に関する対話が展開される。マリクの肌の色に対する象徴的理解をめぐる議論は，ブン・ムハンマドとの対話によって文化的相対性を照射し，さらにムスリム／非ムスリムという宗教的区分がいかにして境界線を形成し，再び他者性を浮かび上がらせるかを明らかにする。

こうした一連の対話と省察を経て，ラビノーは自身の帰還の時が近いことを自覚する。それは単に調査期間の終了を意味するのではなく，調査者としての位置づけが一つの転換点に達したこと，また理想化や緊張を含んだ初期の関係性を超え，相互に差異を引き受ける関係性が一定の成熟を見たことの象徴でもあるといえよう。フィールドワークは，記述対象との関係を通じて，自身をも変容させるプロセスであり，この章ではそれが「友情」という極めて人間的な形式として結実している。

本書の結論では，フィールドワークにおける文化的事実が，あらかじめ存在するものではなく，人類学者とインフォーマントの相互行為の中で解釈的に生成されるものであることが，改めて強調される。人類学的知識は，文化の境界を越えた対話的実践のなかで生まれるのであり，そのプロセスには，インフォーマントによる自己省察と文化の客観化，そして人類学者の解釈が不可欠である。こうした解釈の土台には，共通言語の構築がある。これは単に言語的な共有にとどまらず，長期にわたる関係の中で育まれる相互理解の枠組みであり，特定のインフォーマントとの継続的な関係性が前提となる。したがって，このような協働的理解は，すべてのフィールドで再現可能な普遍的枠組みではないことにも留意する必要がある。

また，ラビノーが強調する重要な論点として，感情的な危機や葛藤もまた，単なる調査上の障害ではなく，既存の理解や関係性の前提が崩れる局面において，調査者が現場で経験する「解釈の核」として意味づけられることが挙げられる。ラビノーにとって，こうした感情的経験こそが，フィールドワークの推進力となる。

結論後半では各章での出来事が振り返られ，インフォーマントたちとの間主観的関係がどのように形作られてきたかが再確認される。その過程で，ラビノーのフィールドワークは単なる観察や記録の連続ではなく，経験の集積を通じて一つの有機的な知識空間を形成していく。最後に彼は，「他者性」を本質化された不可知の何かとしてではなく，「異なった歴史的経験の総計」（p. 237）であったと述べる。このように，人類学的理解とは，そうした他者性を浮かび上がらせる地平としてのフィールドワークから始まり，個人的経験と相互的解釈という繊細で変容的な実践を通じて編み上げられるものである。

3. 小考察：他者性への対峙と感情の揺らぎ

本書を通して描かれるラビノーのフィールドワーク経験には，各章ごとに一人の主要人物が登場し，調査者とインフォーマントとのあいだに構築される関係性の多様なかたちが提示されている。彼らとの相互行為は，情報の取得にとどまらず，調査者自身の感情や価値観を揺さぶる出来事として描かれ，フィールドワークの心理的側面の不可避性が明らかになる。本節では，こうしたラビノーの経験を手がかりに，他者性に対峙したときに調査者の内面に生じる感情のゆらぎについて，自身の調査経験と照らし合わせながら考察を加える。

本書評の筆者は，2025 年 8 月よりモロッコ中南部の都市マラケシュにおいて，現地アーティストの芸術実践に関するフィールドワークを継続している（本書評の執筆期間は 2025 年 11 月から 12 月である）。当初は，人類学者

としての立ち上がりを意識し，目に映る光景や耳に届く会話を，異文化との遭遇に伴う高揚感や緊張感のなかで，すべて学術的記述へと変換しようと試みていた。だが，調査拠点に通う日々のなかで，計画的インタビューによって保たれていた安定感は徐々に揺らぎ，インフォーマントとの個人的関係の深まりとともに，予期せぬ出来事や感情的な動揺が調査そのものに影響を及ぼすようになった。

たとえば，文化センターで実施されている演劇ワークショップに参与するなかで，筆者が経験した一人のアーティストとの関係は，その象徴的な事例である。このワークショップでは，毎月末に舞台公演が行われ，参加者がモロッコの社会問題を題材に共同で脚本を創作し，上演に向けて準備を重ねている。ワークショップを主導するのは，現代演劇への情熱とモロッコ社会への批評的まなざしを併せ持つマラケシュ出身のアーティストであった。しかし，筆者と彼とのあいだには常に一定の距離感があり，それは筆者がワークショップにおいてどのように扱われるべきかを彼自身が明確に掴みきれていない様子からも感じられた。実際，配役を決める場面でも筆者の役を決めあぐねることが多く，調査という立場に加えて，言語能力の限界，演技技術の未熟さ，関係継続の不確実性といった要素が，筆者の存在を宙吊りにする要因となっていたのかもしれない。

ある日，彼は筆者にこう語った。「君は僕たちにとって，とてもエキゾティックだ。君が僕たちのことをそう思っているように。だから（アダムとイヴがリンゴを食べる人類誕生のシーンにおける）イヴの役は合っている。君がモロッコ人と組んで，禁じられているけれど魅惑的なものに導くという構図は，メタファーとしてうまく働くかもしれない」。この発言には，筆者が外部者として抱えている視線が，内部の人にいかに再帰的に意識されるかが象徴的に表れていた。そして当時の筆者にとっては，「参与」という理想的な働きかけに向けて開かれているはずだった自身の立場が，一義的に固定されてしまうことへの居心地の悪さを覚えた。続けて筆者が痛感したのは，自分自身もまた，調査対象と同様に関係のなかで象徴的に配置されていたという事実である。筆者は「エキゾティックな」存在として他者化され，イヴという象徴的役割に割り当てられることで，彼にとっての文化的距離を視覚化する装置となっていた。それは，単なる演劇上の配役を超えて，筆者と彼のあいだにある越えがたい他者性を，寓意的に固定する試みとも読み取れる。言い換えれば，彼が筆者をシナリオのなかに組み込むことは，調査者という曖昧な存在に一つの枠を与え，その意図や関与の度合いが見えにくい外部者との関係に伴う不確実性を和らげるために関係を制御可能なものとする安全装置でもあったように思われる。

このような象徴的配置は，ラビノーが言及していた，他者性の直接的経験と共鳴する部分があるように思える。他者との関係が流動的に交渉されるなかで，自身の立場が予期せぬかたちで再編されるという場面において，調査者はただ他者を理解しようとするだけでなく，自らがいかに他者の物語に組み込まれているかを意識せざるを得ない。筆者にとっても，「エキゾティックな存在」として象徴化される出来事は，単なる違和や混乱として消化されるものではなく，関係の構造や距離感を問い直す契機となった。ラビノーがそうした瞬間を関係性の現れとして捉え直していたように，感情の揺らぎはむしろ，フィールドにおける関係の非対称性や距離感を理解する可能性を切り開く重要な入り口でもあるのではないかと考える。

また，ある月末の公演の際，筆者は当アーティストからバックステージに控えるよう指示を受けた。彼はその理由を，他の参加者の前で「君はアラビア語を話さないから黙っていられる。バックステージでは静かにしてもらわないと困るから，君が一番の人選だ」と説明した。その語り口に悪意は感じられなかったものの，筆者の内面には不意の隔たりが生じた。「自分が理解しようとしてきた言語は，彼らにとって同じ言語ではなかったのか」という疑念とともに，屈辱や怒りといった感情が交錯したが，筆者はその場で応答することはできず，バックステージで沈黙するほかなかった。

このような経験に直面したとき，最初に湧き上がったのは怒りや疎外感であった。しかし同時に，それらの感情を既存の理解枠組みに回収し，出来事を過度に意味づけることで処理しようとする衝動も芽生えていた。すなわち，感情的な揺らぎを文化的差異へと回収して自己を守ろうとする反応である。だが，その直後から筆者の思考には問いが生じた。たとえば，彼の発言は確かにマラケシュに特有のやや侵犯的な話術として，筆者に半ば強制的に参与感を与える意図を含んでいたのではないか。あるいは，舞台裏での沈黙の要求も，筆者のアラビア語能力を逆手にとった適任という合理的判断だったのかもしれない。バックステージとは，単なる待機場所ではなく，演じられる

ものの裏側にある，創作の意思決定や関係性が動いている半ば閉じた空間だった。そのような場において，筆者自身はどのような関わりを望んでいたのだろうか。

ヴィンセント･クラパンザーノは，「あらゆるフィールドワークには，顕在的にも潜在的にも，『新しいもの』『エキゾティックなもの』『他者性』への開かれた姿勢と，自らの志向性や偏見への還元的な忠誠とのあいだの葛藤が存在している」［Crapanzano 2010］と述べている。異文化への開かれた姿勢はしばしばリスクや不安定さを伴い，逆に，安定を求めて他者性を手近な文化的枠組みへと還元することには，ある種の安心感がある。調査者がフィールドで得た知見をどのように捉えるかは，常にそのあいだの緊張の中で揺れ動いており，その選択はときに強い感情を伴う。ラビノーのフィールド記述においても，調査者が経験するこうした感情的な裂け目の瞬間に繊細なまなざしが向けられている。彼のエピソードから導き出されたように，調査における感情的揺らぎや関係の不確実性こそが，文化的意味を浮かび上がらせる原動力になり得るということである。つまり，理解不能な経験や違和感を押し殺すのではなく，それに向き合い言葉を与えていく営みそのものが，人類学的知をかたちづくる重要な局面である。本書を通じて示されるのは，調査者の動揺や葛藤が，むしろ他者との関係を深める契機となりうるという視点である。このような観点から振り返ると，筆者が経験した居心地の悪さや戸惑いもまた，他者性への開かれと安定への回収との緊張のなかで生じたものとして位置づけられる。筆者自身の経験もまた，まさにそのような知の出発点に，自らも立たされていたのだという気づきを，本書は改めて促してくれた。

4. おわりに

本書『異文化の理解――モロッコのフィールドワークから』は，フィールドワークを通じた知の生成が，情報の収集ではなく，関係性の構築と感情の揺らぎを含む相互行為の中で立ち上がるものであることを示している。調査者とインフォーマントのあいだで交わされるやりとりは，一つひとつが他者理解の試みであり，それは同時に調査者自身の変容をも伴うプロセスである。

もっとも，ラビノーが長期にわたるフィールド経験を通して到達した省察と，比較的初期段階にある筆者自身の経験とでは，その射程や深度に明確な違いがある。それでも，筆者自身の経験と重ねて考えるなかで，感情の動きがどのように記述されうるのか，またそれがどのように人類学的知識へと接続しうるのかという問いが浮かび上がった。まだ始まったばかりのフィールドワークにおいて，本書は，感情的経験の重要性と，それを思考の起点として捉える視座を与えてくれる。他者への接近は常に不安定で，時に葛藤を伴う。しかし，まさにその揺らぎのなかに，記述されるべき経験があり，新たな問いが芽吹く場となる。今後続いていく調査においても，本書から得たまなざしを手がかりに，感情の奥行きを含んだフィールドワークの可能性を模索していきたい。

引用文献一覧

Crapanzano, Vincent
2020　“At the Heart of the Discipline.” *Emotions in the Field*, pp. 64–88. Redwood City: Stanford University Press.
Davies, James
2020　“Introduction: Emotions in the Field.” *Emotions in the Field*, pp. 10–41. Redwood City: Stanford University Press.